

志賀直哉『或る男、其姉の死』論

——「小説家」の死／「小説家」の誕生——

山 口 直 孝

『或る男、其姉の死』（原題『或る男と其姉の死』、『大阪毎日新聞夕刊』大正9年1月6日～3月28日）は、独立して論じられることの少ない作品である。志賀直哉にとって初めての、そして唯一の新聞連載小説である本作は、しかしそれ故に文芸誌・総合誌掲載作品を中心とする月評の対象からは外れることになった。呂運亨来日をめぐる報道のために、連載が不定期になり、時には三週間以上中断するという偶然的事情も、読者の母数を減らし、評価の空白を生む方向に作用したと考えられよう。締切りに追われ、執筆に余裕を持てなかった記憶が作者に否定的に働いたこともあってか、連載終了後『或る男、其姉の死』はしばらく放置される。修訂が施され、作品集『雨蛙』（改造社、大正14年4月）に収められるのは、それから五年後のことである。既に『暗夜行路 前篇』（新潮社、大正11年7月）が上梓されたその時点で、表題にも選ばれなかったこの作品が注目を集めることはなかった。『或る男、其姉の死』が次に世に供されたのは、岩波文庫の一冊としてである（志賀直哉『和解・或る男、其姉の死』〔岩波文庫、昭和2年12月〕）。この版には、以下に引く作者の言葉が掲載されていた。

「和解」は事実をそのまゝ書いた。

「或る男、其姉の死」は「和解」以前の事実を出来るだけ小説にして書いてみた。

前者は此事実を経験しつゝ、ある間に書き始め、十五日間で書きあげた。作為もなく、さういふ方の苦労は少しもしなかつた。只、書く気持には常に亢奮があつた。

後者はそれから数年後に書いたものだが、形式に無理があつたためか、大変骨を折つた。そして骨を折つた割りには効果があがらなかつた。

作品の出来栄から云へば私は前者をとるが、後者もその後読返へして見て、案外骨折甲斐のあつた事を認めた。同じ材料から生れたものだと云ふ意味で、此二つを並べる事にした。(「跋」)

作品の題材が『和解』と同様、作者の実体験に基づくものであること、しかし『或る男、其姉の死』の場合には「小説」としての虚構が施されていること、作者が積極的に評価するのが『和解』の方であることなどが、ここでは言明されている。以後、『或る男、其姉の死』は、『現代日本文学全集 第二十五卷 志賀直哉集』⁽¹⁾(改造社、昭和3年7月)、『速夫の妹／改造文庫第二部第七十三篇 志賀直哉全集 第五卷』(改造文庫、昭和7年2月)、『志賀直哉全集 第六卷』⁽²⁾(改造社、昭和13年4月)、『或る男、其姉の死／現代長篇小説全集 第二卷 志賀直哉篇』⁽³⁾(三笠書房、昭和11年11月)、『或る男、其姉の死』⁽⁴⁾(細川書店、昭和21年12月)、日本ペンクラブ編『現代日本文学選集I』⁽⁵⁾(細川書店、昭和23年8月)、『志賀直哉選集 第四卷』(改造社、昭和24年10月)、『志賀直哉作品集 第二卷』⁽⁶⁾(創元社、昭和26年6月)、『大津順吉・和解・或る男、其姉の死』⁽⁷⁾(岩波文庫、昭和35年3月)などに収録されるが、多くの場合そこには、先の引用文と相似た志賀の自作解説か、あるいはそれらを紹介する解説の類いが付せられていた。本編と併せて提供されたこれらの文章は、作品理解の指針として読者に作用したと思われる。元々作者の言説は、特権的に扱われがちであるが、『或る男、其姉の死』に関しては、それ以前に目立った批評が存在しなかつたために、志賀の発言が一層の重みを以て受け止められることになった。「一つ木から生えた三つの枝のやうなもの」と規定される『大津順吉』・『和解』・『或る男、其姉の死』のうち、志賀の証言に従えば唯一「事実と作り事との混合である」⁽⁹⁾『或る男、其姉の死』が、最も作者の言説の影響を被るといふ振れた事態が、そこで出現する。とりわけ、「創作余

談」・「続創作余談」で志賀が執拗に自作の事実依拠性に拘っていたことを知る読者にとって、「作り事」という発言は、「この作品は少しく陰気臭く、愉快な作品でないから、私は余り愛着を持たない」という感想と共に、否定的な作品評価を決定づけるものであつたらう。

『或る男、其姉の死』は、詳細な検討が行われなまま、作者の証言のみを根拠として失敗作と見做され続けて来た。例えば、亀井雅司^①は、「作品として有機的統一性を欠くことは明らかかなはずである」と述べる。しかし、その具体的理由として挙げられているのは、「何故姉の死が虚構されねばならぬのか、また姉の死と父との不和は内容的にどのように関係し合っているのか、そのことが全く描かれていない点」である。そこには、形成論的な立場の混入が見られる。また、江種満子^②は「『或る男、其姉の死』は、文学作品としての自律した感動を読者に喚起するにふさわしい作品ではないけれども、それだけに人間としての志賀直哉を窺い知るには格好の作品であるように思う。」と概括している。ここでも、論者の力点は、作者の精神史の解明に置かれている観があり、作品自体への関心は希薄である。中野重治^③のように、『或る男、其姉の死』を積極的に評価する意見もなかったわけではないが、それは例外に属した。

こうした消極的な作品評価の趨勢に異議が唱えられたのは、近年のことである。杉山雅彦^④は、「この作品を単に父との『不和』という側面から、いわば資料的に分析することは、逆にその総合的評価を歪めてしまう危険性を孕んでいることもまた事実なのである。」と従来の理解の在り方を戒め、内在的な分析の必要性を説いた。ここに至って、『或る男、其姉の死』は、ようやく本格的な見直しの時期を迎えたと言えよう。本稿は、杉山の論に倣い、『或る男、其姉の死』の作品論を試みるものである。杉山は、血縁共同体から排除された者の生と死との構図を取り出しながら、「不和」をいわば無化することによって、「死」から「生」へと転換を遂げる、「再生」の物語」として作品を意義づけた。杉山が、父子対立という軸以外に『或る男、其姉の死』の読みの可能性を広げたことを承けて、ここでは「小説」を書く行為が兄から弟に移行していく局面に注目し、一種の役割交代劇として作品を捉える観点を提出してみたい。

二

「或る男」、すなわち「芳行」という名の「私」の「兄」は、「小説家」を職業とする人物である。志賀直哉の像を投影した場合に、自明視されがちなこの事実の整理を、まず行っておく。「兄」が、いつ頃から「小説家」を志し、創作を始めたかについて、作品内で明確な情報はないが、ある程度の絞り込みは可能である。「私」が「私の覚えてゐる最初の衝突」(四)として語る、「父」と「兄」との口論の中には、「全体俺は貴様のしようと思ふ仕事に気が入らないのだ。」(五)という「父」の発言が見られる。このエピソードは、W川沿岸の鉱毒地視察をめぐる対立と大学入学時の制服の仕立てにまつわる諍いとの間に位置するので、高校在学中には「兄」の志望がある程度具体化していたことが分かる。その後、二十二歳で「兄」は、大学に入学する。学部は不明であるが、「第〇高等学校出のUと云ふ法学士」(二十三)に関して、「兄はかういふ側^{がは}の人達に自分の小説の事を云はれるのを神経質に嫌つてゐました。」(二十四)という記述があるのを参考にすれば、文科系に進学したと推測できる。「シエクスピアの五十円程するケムブリッジ版を買ひたいと云つて父と口論をした」(十二)ことも、そのことを裏付ける傍証となる。この進路選択も、「小説家」を目指していたことと無縁ではないと思われる。

「兄」が実際に創作を始めた時期についても、確定的なことは言えない。「兄としては可成り古いものらしい」(四十)として紹介されているのは、「姉」の痣に「不思議な慾望」を覚えた中学時代の記憶を綴った「書捨てて置いた原稿の断片」(四十)である¹⁵⁾。内容と執筆時期とが必ずしも一致するわけではないので、この草稿が中学生の時に書かれたとは断定できない。しかし、「可成り古いもの」という注記を信ずれば、少なくとも高等学校時代以前の習作と考えるのが妥当であろう。

大学入学後、「兄」の創作活動は、ある程度の進展を見せる。このことに関しても、直接の情報は乏しいが、二十四歳

で大学を中退した一つの理由が「仕事の方で少しづつ進んで行つた」(二十九) ことにあることが、「兄」自身によって挙げられていることや、二十五歳で「短篇集」をまとめ、出版していることは、「小説家」としての「兄」がこの時期、順境にあったことを示している。当初「自費出版」の予定であった「短篇集」が最終的には「出版には百円出しただけで、あとは本屋に出さず事にした」(八) という条件で発行されたこと、また「或る雑誌社から仕事を頼まれました。」(二十九) とあるように、原稿の依頼があったことから、「兄」が「小説家」として「世間」(二十九) に認知されつつあったことも窺える。事実、「兄」の作品は、「U」という未知の愛読者をも生み出している。「父」との対立が前景化しているために見えにくいのが、出奔前に「兄」が「小説家」として一定の実績を残している事実は、留意されなければならない。

「兄」の作品の具体的な題名が一切触れられていないのに対して、その内容は比較的紹介されている。例えば、完成することのなかった「長篇」は、友人の言葉によれば、「君自身の事を書いた」(十八) ものである。また、注文原稿で、百円の稿料を「兄」にもたらした作品は、「兄が自家うちにゐた千代といふ女中と結婚しようとした、其時のごたくを其儘に材料としたもの」(三十) であり、これも自伝的色彩が強い。姉の痣をめぐる記憶を綴った草稿も含めて、「兄」の創作は、自身の体験に素材を求めることが多かったと推測される。親類の「H」が斡旋した縁談相手を「妹」が別人と勘違いする事件について、「私」が「これは兄に書かしたい喜劇でした。」(二十五) という感慨を洩らしているのは、「兄」のそうした作品傾向をよく理解していたからであろう。「兄」は、「父」との口論の中で「馬琴でも小説家です。然しあんなのは極く下らない小説家です。もつと本統の小説家になるのです」(八) と宣言している。「父」への反発心が露わであるため、この物言いをそのまま受け取ることはできないにしても、へわがこと^〆を小説化しようとする「兄」の態度が馬琴のそれと相当異なることは、明らかである。愛読者「U」が「小説を見て、人も大概見当がついてゐる」(二十三) という判断をしているように、「兄」の小説は、書き手自身の姿を彷彿とさせる質のものでもあった。題材的にも表現態度的にも、創作に自己を強く投影させている点から、「兄」における「小説家」とは、単に生計を得るための手段ではなく、

人格形成にも密接に関わる内面的な営為を含む職種として意識されていたと言えよう。

実業家である「父」にとって、「小説家」を目指した「兄」の選択は、好ましいものではなかったろう。そのことは、二人の間に一層の摩擦を生む要因であった。しかし、「父」は、「貴様がやるといふ以上それに反対はしない」(五)と述べてもいる。事実、「兄」の創作活動に対して「父」が不当な干渉をしたというような形跡はない。「父」が口にするのは、専ら「小説家」が自活の手段たりえるかという疑念だけである。確かに、この問いかけが、「兄」の精神的動揺を招くものであったということは否定できない。その点に関して、「兄」は一つのジレンマに直面することにもなった。それは、創作の意義を「市価」(三十) という経済性においてしか説明できなかったことである。芸術に携わりながら、その自律的な価値を伝達し得ないでいることは、「兄」の置かれている不安定な状況を物語っていよう。ただし、このことは、「父」との対立と直接関連することではない。自家からの独立にしても、既に作家としての地歩を固めつつあった「兄」にとつて、それは、自己の努力で実現できる課題であったはずである。父子対立の淵源が「芸術の仕事」(五)に進みたということ、「兄」の表明がなされる以前に溯れることも考慮に入れれば、「兄」が「小説家」であることと「父」との不和とは、基本的にそれぞれ別系列の問題であると言える。実際「私」は、「祖母が、父との関係にだけ兄の家出を帰きしてゐるのは誤解なのです。」(三)と記している。とすれば、失踪の背景に「兄」が「小説家」であることから来る事由も考えられなければならないであろう。

三

「父」との問答を契機に、「兄」は家を出て、小豆島での暮らしを始める。この出来事は、「兄」にとって一つの転機となるべきものであった。「兄」は、そこで懸案であった「長篇」の執筆に着手する。その完成は、「一年か一年半の生活費」(十七)をもたらずと共に、「小説家」としての自信を深めさせていたであろう。しかし、「兄」の試みは、失敗し、

「長篇」は遂に日の目を見ていない。慣れない環境での一人暮らしが悪く影響したにせよ、この挫折は、本質的には「兄」の「小説家」としての能力や適性の欠如に原因が求められるのではないか。自家に戻ってからも、「長篇」の執筆が進行していないこと、また、それ以降新たな創作が行われた形跡がないことは、この推定の状況証拠となる。「兄」においても、そうした自己の現状は、停滞として実感されていたようである。家出の際に「姉」に宛てた手紙の中で、「兄」は、大学を中退した頃を「比較的勉強してみた時代」（二十九）と回顧している。この表現は、その後の進捗が意に染まぬものであったことを暗示する。さらに、次の一節も注目される。

それにしても、父上は全体僕に何を望んでいらつしやるのでせう？ 僕が芸術上の仕事でひとかどの事をした所で、そんな事は父上にとつては爪のあかです。僕はさう考へます。それより反つて、「僕には逆も芸術上の天分はありません」かうとでも若し云へば初めて父上は僕に笑顔を見せられるかも知れません。然しそれとても、其場ぎりの事です。（三十一）

先に述べたように、この時点で「兄」には、「小説家」として一定の実績がある。にもかかわらず、ここでの記述は、いずれも仮定の形でなされている。それは、「兄」が「小説家」としての自己の資質に疑問を抱いていたためであろう。小豆島行以降、「兄」は、創作に関して一つの危機を迎えていたのである。

「小説家」としての「兄」の苦境は、結局克服されないうで終わる。「姉」への手紙で、「兄」は、自己の行為を「元々自分らしく生きたい所からの家出」（三十二）と位置づけている。しかし、この書簡の中で創作に関わる言及や展望は、一切語られていない。このことは、出奔の段階で「兄」が「小説家」であることを断念もしくは放棄したことを示唆している。「或る男、其姉の死」の力点が、父子対立の原因の追究ではなく、「主人公の内部に巢食い成長した「精神の死」の描出に置かれていることを逸早く指摘したのは、池内輝雄¹⁶であった。「兎に角兄は現在の自身が厭で／＼ならなくなつたのです。勿論兄は父に対して非常に不快を感じて居たのです。然しそれ以上自分が厭で／＼堪らなくなつたのです。」

(二) などの記述を参考に、池内は、「兄」の家出の理由に「自己規制による挫折感と自己嫌悪感」を想定する。首肯すべき見解であるが、「其頃のおどく」とした^ま全で自信のない兄の様子」(三)からは、「小説家」としての挫折を読み取ることもできると思われる。

失踪から九年後、「兄」は、以前とは対照的な風貌で「私」の前に現れる。その変化は、「私」を驚かせ、「どうすればかうも変つたらう」(一)という疑問を起こさせる程のものであった⁽¹⁷⁾。身なりは、「見すばらしい」(三十五)が、「兄」のまなざしは、力強い印象を与え、以前のような自信のなさを全く感じさせない。この変貌を遂げた「兄」の様子が、共感的に語られていた「祖父」の像に類似していることは、注目される。例えば、「柔かい、そして温かい感情を含んで居」ながら、「変な圧迫」(三十五)を感じさせる「兄」の眼は、「祖父」の「静かである、力のこもつた眼」(十二)を容易に想起させるものである。「雑談は巧な方^{たくみ}で」(九) あつたにも関わらず、再会後の「兄」が寡黙になっていることも、「父」と「兄」との衝突を目前にしながら、「最初から仕舞まで遂に一ト言も口をきかなかつた」(十一)「祖父」の態度に重ねることができ。さらに、両者が宗教的境地への接近を見せていることにも、共通性が見出せよう。「祖父」は「晩年になつて段々仏教に親しんで行」(十二)くようになる。「兄」の場合は、実情は不明であるが、「姉」の下を訪れた経緯が「私」によって、「丁度ベツレヘムの星に導かれた東方の学者たちのやうに何百里をへだてた所から兄は何かに導かれて、トボく〜と其処へやつて来たのではないか」(一)と想像されているのが参考になる。「父」の後を継ぎ、家長になっている現在の「私」にとって、「祖父」と「兄」とは、共に「父」の影響圏を脱した一種の超越者として受け止められており、そのことが二人の描写を接近させていると考えられる。「姉」の死後、再び姿を消した「兄」について、「私」は、「私は屹度兄は死んでゐないと信ずるのです。私には何故かさう信ぜられるのです。」(一)と根拠を示すことなく語っている。これは、「祖父」の場合に「祖父を知つてゐれば無説明で容易に信じられる事なのです。」(十一)と説明放棄の態度を見せていたことに通ずる。「私」において、言語表現の困難な対象であると意識されていることも、二人がある高みに達し

た存在であることを表していよう。

「姉」の臨終の席に現れた「兄」は、既に「父」との軋轢に悩み、拘束される人間ではない。杉山雅彦¹⁸の的確な把握にあるように、「兄」は、「既に、姉・母・父、そして弟という「家」の血縁的紐帯を、生活上においても、また精神上においても超越してしまった存在であり、その境遇は、同じく血縁共同体から追放されながら、非運の中で死を迎えなければならなかった姉の末路と好対照を形成するものである。ただ、そうした「兄」の境地が、「小説家」としての役割を犠牲にして獲得されたものであることは、見逃されてはならないであろう。沈黙する人というイメージを付与された「兄」は、へわがこと¹⁹の表現者であった過去とは無縁であるかのようにである。姉の痣のことを忘れていたエピソードは、杉山¹⁹が指摘する通り、「兄」の血縁共同体からの決定的な離脱を表すと同時に、その体験を言語化した記憶すら喪失していることにおいて、象徴的に「小説家」としての死を告げるものでもあった²⁰。「兄」が高みに到達するには、創作への関心は切り捨てられなければならない、そのため未完の「長篇」も含めて、「兄」の生涯の多くは闇に隠れ、本来誰にも知られることはなかったはずである。その「兄」が断念した作業を引き受け、彼の半生の空白を埋めたのは、「弟」である「芳三」、すなわち「私」に外ならなかった。

四

「私」は、「兄」と正反対とも言うべき歩みを辿った人間である。「父」の後妻の子として生まれた「私」は、「兄」の家出後、新たな家督相続者となる。「法科大学」(三)へ進学、その在学中に「気楽な子供のやうな」(三)妻と結婚し、翌年には女兒を得ている。大学卒業後、「姉」の夫が不始末によって絶縁されてからは、「父」の仕事上の相談相手として唯一の資格を持つ血縁者となり、さらに「父」が亡くなった現在は、「其財産をそっくりうけついで相当の仕事をしつつ」(六)、一族を統率する家長の位置にもあるようである。この経緯を形式的に見れば、前妻の子である「兄」と「姉」とが

家から離脱し、「私」が後継者になっていることから、母系における勢力の交代劇と捉えることができる。「父」からその地位を委譲された「私」は、しかし、単に「兄」を反面教師とし、「父」の模倣者になっているわけではない。

「兄」に比して、「私」は、「父」と比較的良好な関係を保っていた。「私も衝突しました」(三十)と述べられてはいるが、その個別の例は提示されていない。「父」と「兄」との不和の根源を、「私」は、「兄」が「祖父母」に育てられ、「父」と適当な心理的距離を取ることが困難であった所に見出している(三十)。それを裏返せば、「父」と「私」との関係においては、一定の節度が常に守られていたことになる。そのことが、二人の衝突を深刻なものにしなかった要因であろう。ただし、対立がなかったことは、必ずしも「私」が「父」に敬意や親愛の念を抱いていたことを証明するものではない。むしろ、現在の「私」の筆致からは、「父」に対する冷静な視線が透けて見える。「並外れて我執の強い方」(六)や「性格的に変に家人をおびやかす方」(十二)という「私」の指摘は、「父」の否定的な気質を端的に捉えたものである。無論、「私」は、「一種の潔癖」(六)などの、「父」の人間的な魅力を紹介することも忘れてはいない。しかし、家長としての「父」の振る舞いに「私」が共感していたことを示す記述は、皆無に近い。そして何より、「父」の死について、「私」が間接的に伝えるだけで、詳述していないことは、「私」の微妙な感情を語るものであろう。⁽²⁾「私」が「家長らしい家長」(三十)と見做しているのは、あくまで「祖父」の方である。この点で、「私」は、「兄」と通じる部分を持つ。再会時の「兄」が「祖父」に近い存在として「私」に印象づけられていることについては、前節で検討した。「私」は、役割としては「父」の後を継ぎながら、心情的には「兄」・「祖父」への親近感を抱く人物である。そのような「私」の意識が、「兄」の半生を作品化しようとした動機の基底にあることは、言うまでもない。

家族の中で「私」は、構成員間の関係を調整し、共同体の維持に努める役割を担っている。例えば、大学の制服をめぐる「父」と「兄」との諍いにおいて、「私」は、次のような行動に出る。

兄は青い顔をして、ブル／＼身を震はしながら、身体で父に突掛つっかかつて行くやうな様子をしました。突掛つっかからしては

厄介だと思つたから、私は二人の間に入つて、無理に兄を兄の部屋に引張つて来て了ひました。(十三)

対立が決定的なものになることを回避するために、「私」は、両者の間に割つて入る。「兄」と「年は十程違」(一)う「私」は、この時、まだ十二歳前後である。「父」と「兄」との不和もあつて、「私」は、早い時期から仲裁者としての立場を引き受けざるをえなかつたのであろう。「姉」に関して、絶縁の処置を緩和するよう「父」に意見をしたり、死期が迫つた際に一家の使者として訪れたりしているのも、同様の意識の現れと解することができる。また、「私」は、「兄」の家出と「姉」をめぐる騒動とによって「急に暗い影がさして来たやうな」(二)自家の雰囲気を変えるため、あえて結婚話を持ち出してもいる。このような振る舞いの背後には、当然のことながら家族個々の成員の感情や意向を汲み取ることのできる、「私」の洞察力がある。「父」と異なる「私」の特徴は、特定の一人に肩入れをせず、全体的な視野に立つて家族を捉えることができる点にある。それは、「父」と「兄」との関係の悪化について、双方に応分の理由があることを指摘しえていることから看取できる。共同体の中にあつて、第三者的な立場に自己を置くことのできる「私」の能力は、この作品の執筆を可能とした一つの要件であつた。

「法科大学」を出て、実業家となつている「私」は、それだけを見れば、「兄」の言う「かういふ側の人達」(二十四)に属する。しかし、一方で「私」は、「兄」からイブセン『人形の家』の話を知りたり(十)、「兄」の小説を愛読する人間でもある。「これは兄に書かしたい喜劇でした。」(二十五)という感慨は、「兄」の作品の傾向を熟知していなければ不可能な発言である。この、文学、とりわけ「兄」の仕事に対する興味は、「私」を小説の制作に取り組ませることになつた直接の要件であらう。既に「兄」は、超越的な境地に身を移し、「小説家」ではない。「兄」が残した作業を引き継ぐのは、血縁共同体に所属しつつ、それを対象化することもできる「私」、実務家でもあり、文学への関心も持つ「私」以外にはありえない。

「私」は、作品の中で執筆の動機を直接には語っていない。ただ、何が書かれ、何が省略されているかを検証すること

で、それを浮かび上がらせることは可能である。まず、この作品は、「兄」が家出をするまでの経過と再会時の様子との記述に重点が置かれている。「兄」の不在中の出来事については、「それからの永い年月に就ては、細々した事はありますこまかくが此所には書きません。姉の良人の失敗、私の結婚、赤児の誕生、さう云ふ事で、さした事もなく、九年経ちました。」(三十四)と触れられるのみである。先述のように、「父」の死も間接的にしか伝えられていない。「私」の関心事となっているのは、あくまで「兄」の動静である。ただし、「兄」に関することでも、「兄」自身が小説化した話題が選ばれることはない。自家の女中との結婚をめぐる衝突を「私」が取り上げないのは(十四)、「それで金を得て父を喜ばさうとした其小説」(三十)との内容的重複を避けようとしたためであろう。同じ時期を扱いながら、「私」は、「其代り此衝突の最中に偶然起つた出来事で、兄自身でも思ひがけない、父に対するいい感情が不意に現れた、その方を書かうと思ひます。」(十四)とあるように、「兄」の「小説」では洩れたエピソードの紹介に努めている。その他の部分についても、「私」が提示しているのは、「兄」が外部の人間に語らなかつたことが中心になっていると言えるであろう。家出の際の「姉」への手紙がほぼ全文引用されたり、「姉」の痣の記憶を書いた「原稿の断片」(四十)の内容が紹介されているのは、その一例である。「妹」の勘違いの挿話も、「兄」に書かしたい喜劇」(二十五)でありながら、「兄」が執筆する機会を持たなかつたために、「私」がやむを得ず記述しているという事情がある。さらに、この「私」による小説全体も、遂に完成することのなかつた「兄」の「長篇」を引き継ぐ試みとして捉えることができる。「私」が小説の制作に乗り出したのは、「兄」が放棄した「小説家」としての側面を代行し、「兄」の仕事の完成を期そうとしたためであった。そうした点に着目する時、『或る男、其姉の死』が、物語内容として「兄」の「小説家」としての死を扱うと共に、物語行為における「私」の「小説家」としての誕生を告げる作品であることが理解されるであろう。

「私」の手によるこの作品は、一義的には、杉山雅彦の言うように、「弟芳三の「手記」という性格を有する」。しかし、「私」の叙述態度には、単にプライベートな記録を綴っているとは言い切れないものが含まれている。そもそも、

この作品は、次のように書き起こされていた。

或る男と云ふのは私の腹違ひの兄です。(一)

この記述は、『或る男、其姉の死』という題名を承けたものであり、「私」が「兄」の半生を一般化を施して語るうとしていることが読み取れる。そこには、「小説」として表現を開いていこうとする姿勢がある。「私は億ひ浮ぶままに書きましたが、出来事の時間的順序が読者に少しはつきりしない気がして来ました。」(十七)と、「読者」の存在に意識的であったり、「兎に角一度引きうけながら、そんな理由を並べて又断る。これは正しく自分の弱い所から来てゐるのだ。(略)何といふ弱さだ。何といふ恥知らずだ。」(十六)のように、本来知ることのできない「兄」の内面が直接提示される手法が採られていることも、「私」が「小説家」としてこの作品に臨んでいることの証左となろう。また、「兄」の手紙を紹介する途中で、「私」は、「作者云ふ。」(三十)という形で名乗りを上げ、注記を加えている。亀井雅司⁽²³⁾や江種満子⁽²⁴⁾によって論難されて来た箇所であるが、これまでの考察に即して言えば、この「作者」は、現実の志賀直哉が破格に登場したものではなく、「私」の「小説家」としての意識がそのような自称を選択させたと理解するのが適當であろう。そのような「私」によって、『或る男、其姉の死』という作品は執筆され、そして、再び兄が現れることを予見しながら閉じられる。この「小説」の完結は、「小説家」の役割が「兄」から「私」へと移行したことを最終的に確認させる出来事でもあった。

五

「私」によって執筆された『或る男、其姉の死』は、「兄」が書き残した作品と交渉しながら、「兄」の半生の空白を埋める小説である。「私」の作業は、十五年以上の年月を置いて開始されているが、内容的には「兄」の仕事と細部まで呼応するものであった。この事実を、『或る男、其姉の死』自体の精緻な作品構造を示してもいよう。

従来の『或る男、其姉の死』研究では、「兄」を中心化した読解が主流であった。ほとんどの論者がそこに志賀直哉の自画像を見出して来たわけであるが、「小説家」の交代劇として作品を捉えた場合、「私」は、「兄」と拮抗する存在となる。「小説家」としての志賀直哉を問題にするならば、当然「私」にもその投影を読み取らなければならないであろう。その意味で中村完の「或る男、其姉の死」は、形式上の主人公「私」が父との対立という実事を中心に作者の自己客観を代行する部分と、「私」の解釈のとどかぬ世界を「兄」が作者の仮想を代行して生きる部分とから成る。」という意見は正しい。ただし、その場合には、志賀がなぜ「兄」と「私」という二人の代行者を必要としたかが問われる必要がある。血縁共同体から離脱し、「死に反抗もしない代り、又それにも決して打ち負かされないやうな眼」(三十七)を獲得した「兄」は、超越的境地に達した者として、一つの理想的な存在とも言える。しかし、「兄」は、自己完結的に充足しているためか、既に表現者ではない。その「兄」の姿を言語化するためには、他者である「私」が召喚されなければならないのである。逆に言えば、「小説家」であろうとする限りは、「兄」のような解脱は不可能となる。ある意味で『或る男、其姉の死』は、表現者であろうとする自覚と宗教的心性との絶対的な乖離を認識させる作品でもある。おそらく、作者である志賀直哉もそのような自家撞着を感知していたことであろう。自作についての「少しく陰気臭く、愉快な作品でない」という印象は、自己の投影を二つの人格に分割せざるをえなかった事情にも由来するのではないか。少なくとも、『或る男、其姉の死』は、志賀直哉文芸において、「小説家」という職業を相対化する要素が出現する最初の作品であることは確かである。その点で、この作品は、自己生成小説の典型である『和解』(『黒潮』第2巻第10号、大正6年10月)とは大きく様相を異にしている。「小説家」であることへの懐疑のモチーフは、その後文士の不品行を題材として扱う『雨蛙』(『中央公論』第39年第1号、大正13年1月)、芸術と実生活の問題を扱った『晩秋』(『文芸春秋』第4巻第9号、大正15年9月)・『邦子』(『文芸春秋』第5巻第10号・第11号、昭和2年10月・11月)と受け継がれ、『暗夜行路』の終結部へ連絡していくことになる。自己否定の要素を徴憑と考えた場合に、後期作品の一つの始発点とも見做し得る『或る男、其姉の死』については、志賀直哉文

芸における位置付けをめぐっても今後さらに検討されなければならない。

注

- (1) 志賀直哉「創作余談（志賀直哉集の巻末に附す）」を付す。
- (2) 志賀直哉「続創作余談（志賀直哉全集の巻末に附す）」を付す。
- (3) 網野菊「解説」を付す。網野の文章は、その大部分が志賀の発言及び尾崎一雄・広津和郎らの批評の紹介に費されている。「或る男、其姉の死」について、独自の見解は皆無である。
- (4) 志賀直哉「あとがき」を付す。
- (5) 志賀直哉「作者のことば」を付す。
- (6) 阿川弘之「解説」を付す。「或る男、其姉の死」に関して言えば、阿川の言及は、志賀の自注を忠実になぞるに止まっている。
- (7) 志賀直哉「あとがき」を付す。
- (8) 志賀直哉「創作余談（志賀直哉集の巻末に附す）」（『改造』第10巻第7号、昭和3年7月）。
- (9) 注（8）に同じ。
- (10) 志賀直哉「続創作余談（志賀直哉全集の巻末に附す）」（『改造』第20巻第6号、昭和13年6月）。
- (11) 亀井雅司「或る男・其姉の死」の問題」（『女子大國文』第53号、昭和44年5月）。
- (12) 江種満子「或る男、其姉の死」試論——〈姉〉の存在をめぐって」（『二冊の講座 志賀直哉 日本の近代文学3』「有精堂、昭和57年10月」所収）。
- (13) 中野重治「或る男、其姉の死」（『志賀直哉全集 月報』9、昭和49年3月）。中野は、例えば「明治」の終りの時期の日本の一面が思うさま描き出されている」点を作品の魅力として挙げています。
- (14) 杉山雅彦「或る男、其姉の死」論——「或る男」という枠組——」（『文芸と批評』第7巻第7号、平成5年5月）。
- (15) この記述には、矛盾がある。「九歳の時、実母死し、私の母来る。」（十七）、「十か十一の時に実母を失った姉」（三）とあるように、「兄」と「姉」との年齢差は、一、二歳である。姉の痣をめぐるエピソードは、「此死んだ姉が、此所に嫁入った年の事」（四十）であり、それは「二十歳の時」（二）と記されている。とすれば、「兄」の年齢は、「十四五」（四十）歳ではありえない。ただし、「兄」の年齢が十八、九歳と考えても、「其頃中学校に通つてゐた」（四十）という説明には、一応当てはまる。
- (16) 池内輝雄「志賀直哉「或る男、其姉の死」論」（『大妻女子大学文学部紀要』第4号、昭和47年3月）。のち、池内輝雄『志賀直哉の領域』「有精堂、平成2年8月」に収録。
- (17) 姿を消してからの「兄」の消息は、一切が不明であり、その空白期は、「私」にとっても謎のままである。また、「私」との再開を果たした際にも、現在の「兄」の内面が語られることはない。失踪後の「兄」の描写が「私」の主観を相当反映したものであり、「兄」の実像を保証する

ものでないことは、注意を要する。しかし、今回の論では、その問題への言及は行わない。

(18) 注(14)に同じ。

(19) 注(14)に同じ。

(20) その意味で『或る男、其姉の死』という題名は、暗示的である。破格にも見えるこのタイトルには、「其姉」だけではなく、「或る男」の「死」も含意されている。

(21) 「父」の死は、「兄」が「父」と和解する可能性が永久に失われたことを告げるものであるから、その文脈に即した場合は、最も重要な出来事の一つであるはずである。にもかかわらず、殆ど言及がないことは、この作品が父子対立を中核とするものでないことを暗に物語っている。

(22) 注(14)に同じ。

(23) 注(11)に同じ。亀井は、「ここでの「作者」は作者志賀のことのように考えられる。」と解釈し、「そも／＼この作品は弟が書いたという体裁をとる以上、「作者云々」ということわり書きは必要ないのではないか。」と疑義を表明している。

(24) 注(12)に同じ。江種は、「このもう一人の弟は時に作者自身と混同して弟の発言であるべきところを「作者云々」(三〇章)と書くくらいであるから、ごく便宜的な設定と考えられる。」と述べるように、「私」の存在に重要性を認めていない。

(25) 中村完「『暗夜行路』と『或る男、其姉の死』」(『日本近代文学』第23集、昭和51年10月)。

※本文引用は、『志賀直哉全集 第二卷』(岩波書店、昭和48年7月)所収のものに拠り、漢字は適宜新字体に改めた。